

# 教 仏 庵 草

第238号  
(発行日)

2010年4月1日

発行所：真宗大谷派念佛寺

〒6638113 西宮市

甲子園口2丁目7-20

電話・FAX (0798)

63-4488

(発行人) 土井紀明

mail:bachkantata2mubansou@zeus.e

onet.ne.jp

http://www.eonet.ne.jp/~souan/

《 聞法会ご案内 》

○ 〈同朋の会〉

毎月22日午後2時

○ 〈念仏座談会〉

毎月2日および12日

午後3時より。

○ 聖典共学会――毎月6日。

午後7時より。

\* 8月22日同朋の会および8

月12日念仏座談会は休みます

## 蚕繭の自縛と浄土

三月二十二日、念佛寺における春のお彼岸の法話の中で、迷いの世界と浄土の世界について、蚕のたとえで我らの迷いの世界をいい、浄土は無量の光明世界であることをお話しました。その時、法話を聞かれた方から、「蚕のたとえは非常に分かりやすい。そのところを文章に書いて欲しい」と要望されたので、この紙面に少し述べてみたい。

〈蚕のたとえ〉というのは、中国の浄土教の祖師曇鸞大師の『浄土論註』に出ている。その中で、迷いの世界の衆生のすがたを「これ虚偽の相、これ輪転の相、これ無窮の相にして、シヤク蠖（尺取り虫）の循環するがごとく、蚕繭（蚕のまゆ）の自縛するがごとし。あはれなるかな衆生、この三界に締られて、顛倒・不浄なり」と簡潔に述べておられる。衆生が生死輪廻して、迷いの境界をめぐり続けて、そこから

なかなかに出られない有様は、ちようど尺取り虫が同じ処をぐるぐる循環しているようなものであると、その流転の相を尺取り虫にたとえておられる。

そして次に、虚偽の相、無窮の相を、蚕繭のたとえで巧みに表現しておられる。蚕繭とは、蚕のまゆのことで、蚕は自らの口から出した糸で自分自身を覆ってその中に自分を閉じこめている。それを「蚕繭の自縛」というが、ちようどその様に、衆生は自らが起こしている妄念妄想によって、自分自身を包む込み、その中に閉塞して、そこから容易に出られない状態をたとえたものである。それが穢土という迷いの境界にいる衆生のすがたである。まことに巧みなたとえである。

この事を、もう少し詳しく言えば、私たちの人生は一日の連続であるが、その一日は「見る、聴く、臭う、味

わう、触れる、思う」という営みの外にはない。そういう経験の連続が一日となり一生となる。人間の営み

全体は「意識活動」を離れてはない。いわば心を離れては全経験はないのである。心がなければ、石ころと同じようなもので、石ころには世界は感知されていないであろうから、石ころには世界はない。世界や環境があるのは、もとに心（意識）があるからである。私個人にとって生活のすべては意識内容としての経験に収めることができる。目の前の庭に桜の花が見えるということは、私においては桜の花が心で経験されている事を離れてはない。電車に乗って、私の隣りによその人が坐っているのは、隣の人をそのように心に感知している事からを離れてはない。チゴインエルワイゼンのメロディが聴こえていることは、その様に聴いている心の経験と一つのことである。

思ったり考えたり、時には夢を見たりするばかりか、外界の他者や事物を感知しているのは意識（心）であって、

心を離れては私にとって外界も無いといっても過言ではない。

ところが私の全経験を成立させているこの心が迷いでゆがんでいると、この心を場とする経験もゆがんでくる。鏡がゆがむと鏡に映る形もゆがむように。ではその迷いの心とは、どういうものであるか。それは覚れる先人が、へ知ると知られるものとを分離して認識していること」といわれ、妄分別の心といわれている。知る側と知られる側とを分離してしまう。知る私と知られる世界とを分けて受けとってしまう。一般に私たちの考えは自然とそうなっている。

具体的な人間関係の面においては、自分と自分以外のものとを分け、自分と他者とを分けると、そこに自分を愛執し、他とは相対するようになる。

他を愛するといいうのも、自分を愛する限りにおいてであって、逆に迷惑をこうむると憎んでいる。自分に都合の良い者はこれを愛し、都合の悪い者は憎む。そして自分に関

係ない者は所詮どうでもよい者にしてはいる。その様に自分を分かち、自分を愛し、他者に対しては、これを自分の都合で憎んだり好いたりしてはいる。

さらに言えば、知る自分に愛執するとは、同時に身体を自分として愛執することでもある。

それゆえ、自分の身体を護り、安全に維持しようとし、またできるだけ身体を快適にして生きたいと欲する。そのため財欲を起こし、色欲を起こし、さらには名誉欲や権力欲を起こしている。

こうして人生は、自他を区別し、自分を中心とする考えでもって我欲を充たそうする、そういう生き様から一歩もでない。

それは誰のせいでもない、自分自身の迷い心（無明）を源とする自己中心的想念によつてである。

こうして迷いの衆生の有様は、起こした無明・我愛の思い、いわゆる自己中心の妄念の中に、自分自らを閉じこめているようなものである。それゆえそれはちようど、蚕が己の出す糸によるまゆ（蚕繭）

によつて自分自身を包んでその中に閉じこもる、いわば自限自縛しているようなものである、とたとえられる。

これが穢土に住する衆生のすがたであるとする、では浄土はどうであろうか。

浄土は、凡夫の知見では到底知られない。それは仏の覺りの智見によつて知られる世界である。だから浄土を知ろうと思えば、私たちの考えを重ねることではなくて、仏の智見から説かれた經典によつて教えられるより外はない。釈尊の経説によつて、浄土をうかがうことが可能となる。

〈浄土の経説を通して〉天親菩薩は浄土のことを

かの世界の相を觀ずるに、三界の道に勝過せり。究竟して虚空のごとく、廣大にして辺際なし

とお示しになり、また宗祖は浄土を

真仏土を案ずれば、仏はすなわちこれ不可思議光如来なり、土はまたこれ無量光明土なり。

と示しておられる。

すなわち、浄土は光明が無量で、廣大であつて、ここま

でどこまでも光明ならざるはなし、これが浄土なのだ。あらわされている。

だから、現在の私たちの世界も光明の中、いわば浄土の中である、と知らされる。もし、私たちのいる娑婆世界が

浄土の光明の外であるなら、浄土の光明には限界があるというところで、それならば無量光明土とはいわれない。浄土の光明には際限がないといわれるからである。（土とは領域とか世界の意味）

こうして私たちの娑婆世界も浄土の中であるといわれるが、しかしながら、先ほど縷々述べたように、私たちはそれぞれが無明によつて、自他が分裂し、我愛我執の心を起こして、その想念の中に自らを閉じこめている。いわば、浄土の中にあつて娑婆を虚構（幻想）している。

たとえてみればこうである。太陽は世界を照らし、世界に常に陽光がさんさんとそそいでいる。ところが、私たちは自分で作った、窓の全く閉じられた小屋に閉じこもっているとする、中は暗闇である。その小屋はだれがつくったか。自分が作った。その

様に、浄土の中にありながら、私たちは迷いの想念で自らの小屋を作り、その中に己を閉塞している。

地獄道、餓鬼道、畜生道、修羅道、人間道、天道の迷いの六道というのも、その小屋の中の状態での良し悪しであつて、地獄道は小屋の中に

いても電気もローソクもない、真つ暗闇、いわば暗黒そのものの状態といえようし、一番上の天上界は小屋の中で

も明るい電灯がともつていて、地獄に比べれば快適であるという状態にたとえられよう。しかしながら、どちらにしろ自らの妄想的想念の小屋の中で大きな束縛を受けていることに変わりはない。

そして、光明無量の浄土の働きは、想念の小屋に閉じこもっている私たちに光明と南無阿弥陀仏の名号でもって働きかけ続けてくださる。その大悲の働きによつて、やつと閉じられていた小さな窓が開いて光明が部屋に入ってくる。それがこの世で阿弥陀

仏にあり、阿弥陀仏の攝取のお助けをいただいた姿である。広大な浄土のお働きを小

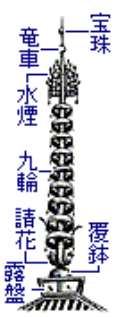
さな窓を通して入る光によつて、ほのかながらも浄土を感じるものが許される。

そしてその広大な光明無量であり寿命無量の働きこそ、

真実であり、やがてこの一生が終わる縁をとおして、その真実と一つにならしていただける、いわば仏にならしていただける、とお聞かせていただき喜ばせていただく。

凡夫の身をもつて一生を生きることは蚕が繭の中にいるようなものであるが、阿弥陀仏の光明名号によつて穴が開けられると、私は光明に包まれていることを知り、蚕の繭は私の生の一代限りであると、お聞かせいただく。有難いことである。

やがて死を縁として、繭――自我の想念とそれと同一化している身体――は捨てられて、浄土の光はまったき相を顕現するのである。それを（死して浄土に生まれる）と仰せられるのであろう。（了）



# 正信偈に学ぶ問答

## (二十六)

本願名号正定業

至心信樂願為因

成等覚証大涅槃

必至滅度願成就

書き下し文（本願の名号は正定の業なり。至心信樂の願を因とす。等覚を成り、大涅槃を証することは、必至滅度の願成就なり）

D 「へ等覚を成り、大涅槃を証することは、必至滅度の願成就なり」といわれる根拠は阿弥陀仏の四十八願の第十一願の誓いにあります」

G 「第十一願はどのような願ですか」

D 「それは大経では

たとい我仏を得たらんに、国の中の人天、定聚に住し、必ず滅度に至らずは、正覚を取らじ

ですが、異訳の大経ではもし我成仏せんに、国の中の有情、もし決定して等正覚を成り、大涅槃を証せずは、菩提を取らじ、

となつています。この（等正覚を成り大涅槃を証せずば）

という異訳の文言から

成等覚証大涅槃

必至滅度願成就

という正信偈の文句が作られたのでしよう。ここは（弥陀の本願を信じた人は等正覚の位、いわば正定聚という仏になることの定まった仲間に入り、ついには大涅槃を覚る、それは第十一願の「必ず滅度に至らしめる」というお誓いが成就したゆえです）との仰せでしょう」

G 「なぜ本願を信じた人は、正定聚の位に入り、ついには仏の証りである大涅槃を証ることができのですか」

D 「そのことで聖人は

弥陀の本願信ずべし  
本願信ずる人はみな  
摂取不捨の利益にて  
無上覚をばさとするなり

と和讃されて、その点を明らかにして下さっています。無上覚とは大涅槃の証りのことであり、仏になることですが、

本願を信じる人は摂取不捨の利益をいただくから、正定聚に住し、やがてこの世を終えて大涅槃を証ると仰せられています」

G 「そうすると摂取不捨の利益にあずかることが非常に大事ですね」

D 「ええそうです。真宗の救済はこれが中心です」

G 「では摂取不捨の利益というのは、どういう利益ですか」

D 「阿弥陀仏のお心にであつて、私の心が阿弥陀仏のお心に摂め取られて離れなくなり、阿弥陀仏のお心が私の主になって下さり、私の心は客になることではありません」

G 「阿弥陀仏にであわれない間は、何が人生の主人公なのでしょう」

D 「自我心です」

G 「自我心が主だったのが、阿弥陀仏が主になって下さるのですね」

D 「ええそうです。本願を信じる一念に阿弥陀仏のお心が届いて信心となり、信心が人の人生の主となるのであり、自我心は仮のもので客になるのです」

G 「そこをもう少し詳しくおっしゃって下さい」

D 「阿弥陀仏のお心に私の心

が摂めとられるということあり、摂め取るのは阿弥陀仏であり、摂めとられるのは私の心ですから、どちらが主人公であるかという阿弥陀仏であり、それはたとえて言えば、船と乗客のような関係です。海を航海するときは、

乗せてくださる船が中心であり主体であり、乗せられる私は客体です。海を航海する力も舵取りも船の側に属するのであり、乗せられる私はお客さんです」

G 「では阿弥陀仏のお心にであうと、いつも阿弥陀仏が主人であるような生活ができるのですか」

D 「実は、そうではないのです。長い間自我である私が主人であると思ひ続け、また身体を自分として同一化し、執着し続けてきたものですか、その習慣が深く深くこびりついていて、この身体がある間は自我心が主のような顔をして振る舞い続けるのです。本当におはさずかしいこと

です」

G 「自我心がいつまでも主のようになっているなら摂取不捨の利益はどうなるのですか」

D 「有難いことに、ふいふいと自我の私に現れて出て下

って、阿弥陀仏が私の主であることをお知らせ下さるので

す。また阿弥陀仏が自我の私といつも共にいて下さることが一度知らされると、その感知が生根底に伏在し続けま

すので、人生の根本気分が明るいのです」

G 「この世に生きている間は仮なる自我心が主のように振る舞い続けるのですね」

D 「ええ、自我の煩惱が主の顔をしてしまうことが多いのは本当に罪深いことであり、申し訳ないことであり、悲しみですね。であればこそ、お念仏を申さずにはおられないのです。煩惱はお念仏の縁なのです」

G 「煩惱がお念仏の縁になるとは」

D 「自我心によってさまざまになわずらい悩みが起ること

を縁として、ナムアミダブツとお念仏が出て下さる。不思議ですね。そうしますと、お念仏の声をとおして、阿弥陀仏が（ここにいて、引き受けておるぞ）と現れて下さるのです。有難いですね。ですからなにかにつけお念仏を申さずにはおれなくなるのです」

# 死してよみがえる

一週間の春の彼岸が過ぎた次の朝、床から起きようとした時、ふっと「我が神、我が神、どうして私をお見捨てになつたのですか」というあのイエスの最後の言葉が浮かんだ。同時に、この部分を歌うバツハの『マタイ受難曲』の旋律がわきあがった。『マタイ受難曲』のこの部分の一つのクライマックスで、悲しみの極まりを美しく歌いあげられていて、聴く者の心を深くゆぶる旋律である。

イエスが神聖な神殿を汚した罪で十字架にかけられて処刑される際、息が絶えようとする最後に大声で「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」叫んだと、聖書のマルコ福音書とマタイ福音書に記述されている。この意味は、「我が神、我が神、どうして私をお見捨てになつたのですか」と聖書記者によって注されている。そして、聖書によると、イエスは十字架上で死んでほだなく復活したという。

この「我が神、我が神、どうして私をお見捨てになつたのですか」というイエスの言葉と復活とが頭に浮かんできて、「ああそういうことか」とうなずけた思いがした。

このイエスの「エリ、エリ・レマ、サバクタニ」の言葉は何を意味するのか、神学者によってさまざまに解釈されてきたであろう。自分の勝手な解釈であるが、この言葉の内面的意味が今回何か分かったような気がしたのである。

それは人が死んでよみがえるという精神的な回心においては、この「我が神、我が神、どうして私をお見捨てになつたのですか」という門を通過してよみがえるのではなからうか。

それはそうとこのイエスの言葉は何となく悲しみであるか。何となく悲痛であるか。人間のもっとも深い嘆きであり、人間究極の悲しみであろう。

しかし、これは一人イエスだけの悲しみではない。人間であるかぎり人間の限界において起こる悲しみである。

これについて思い出すのは、故西元宗助師のお話である。精確な内容は忘れたが、ほほこやういとお話である。

師がお若い頃、一時満州に渡り建国大で教鞭をとっておられた。終戦間近、進攻してきたソビエト兵に連行されてシベリヤ行きの貨車に放り込まれた。貨車に乗せられた師は、初めのうちはすぐに下車が命ぜられ解放されるといふ希望をもっていたが、汽車は師の期待にお構いなしに北へ北へと進んで行った。そんな時、「しまった。この世の地獄のシベリヤへ連れて行かれる。もうだめだ、生きて家族の処にも日本にも戻れそうにな

い」と、絶望的になった。日ごろのありがたい信心は消え、それまで阿弥陀仏のご恩は有難いなど思っていた思いはすっかり吹っ飛んでしまい、それどころか、とうとう「仏様バカタレ」と吐き捨てて、

貨車の床に身を投げ出してしまった。ところがその時はからずも、ナムアマダブツとお念仏が口に出てくださった。「ああ、仏を見捨てたこんな私に阿弥陀仏は来て下さっていたのか」と驚いて、初めて阿弥陀仏の広大な慈悲にであい、それからは「よし、シベリヤの大地で生きぬこう」という勇氣と喜びが湧いてきたのである。

このようなお話を二度ほどお聞かせていただいた。

信心を求め、お助けを求め、念仏聞法を重ね重ねての旅の果てに何が残るか。

それは有難い信心でも尊い思念でもなく、またハッキリした目覚めでもなく、ただただ元の木阿弥の、一個の肉塊があるのみになる。まさに善導大師の二河譬に「我今回らばまた死せん、住まらばまた死せん、去かばまた死せん。一種として死を勉めず」という、出口なしの状態である。「二種として死をまぬがれず」で、死ぬしかない。(仏法に見捨てられ、阿弥陀仏に見捨てられ、念仏に見捨てられてしまう)。いな見捨てられたとしか

思えなくなる。仏法から除外されている身は、もはや瞑目合掌墮ちるよりほかはない。その時に自らの口より出てくる言葉はまさに「我が阿弥陀よ。私をお見捨てになってしまったのですか」と言うほかなくなってしまう。

ところがその場こそ、同時に阿弥陀の大悲が突出したもう場である。「そんなお前だから、我が

引き受けるのじゃあないか」と、阿弥陀仏の方からナムアマダブツとなつてお出まし下さる。「そんなお前を見捨てない。ここについておるぞ」と広大な丸だすけのお慈悲をそそいでいたもう。まことに不思議である。

それとともに、いかにそれまで阿弥陀仏に反逆し、阿弥陀仏に反抗し、阿弥陀仏を無視し、阿弥陀仏に怨みさえもつていた、その罪と愚かさど申し訳なきが知らされる。仏に見捨てられたと思つていた時も、実は阿弥陀仏は私と共にあり、私に喚びつめであり、手をさしのべて私をつかまえにこられていたのである。それを知らずに仏を逆に誇つていたのである。仏に敵対していたのであった。まことに申し訳ないことである。

イエスが「エリ、エリ、レマ、サバクタニ」と叫んで死んだ。その死を通して神の下にイエスは復活した。それは信仰的な歴史の物語であるとともに、一個人の、精神的に死んでよみがえる回心の出来事の物語でもある。

勿論、信心への道はすべてこういう典型的でないしは頭在的な回心のストーリーを経るとはかぎらないであろう。しかし、信心を賜るといふ内面には、自覚的か否かにかかわらず、このストーリーがこもっていると思う。(了)

## 《念佛寺永代経法要》

四月二十二日(木)

午後二時始まり